エラブオオコウモリ

与永良部島

観察ガイド

目次

はじめに　1
エラブオオコウモリの特徴　2
エラブオオコウモリを見つけよう！　5
食痕を見つけよう！　7
もっと知ろう！エラブオオコウモリ　8
観察に行こう！　12

はじめに

エラブオオコウモリは、口永良部島およびトカラ列島に生息するオオコウモリの一種です。1975年に国の天然記念物に指定され、環境省レッドリストでは絶滅危惧IA 類（CR）に分類されています。
口永良部島はエラブオオコウモリが最も多く生息することから、生態調査・研究もこの島を中心に進められてきました。
近年、島民が減ったことやヤクシカやノヤギが増加したことで、エラブオオコウモリにとって重要な被食樹の健全な循環再生が妨げられています。さらに、2014年から2019年にかけて新岳の噴火がくりかえされたことで照葉樹林が広範囲に被害を受けました。エラブオオコウモリの生息環境は悪化傾向にあると危惧されます。
新岳の噴火は島民の暮らしにも大きな影響を与えました。道路の通行規制や、土石流の被害が続き、以前の様な積極的なエラブオオコウモリへの取り組みが困難になっています。
このような状況の中、2019年2月にエラブオオコウモリは「国内希少野生動植物種」に指定され、保全は喫緊の課題となっています。
そこで、島民の方々や島を訪れる方にエラブオオコウモリの魅力や保全の大切さを伝えることを目的に、本冊子を作成しました。
観察方法も紹介していますので、本冊子を活用してエラブオオコウモリを観察してみてください。

エラブオオコウモリの特徴

写真提供:野田武氏（毎日新聞社）

目で見ながら飛んでいる

聴覚にたよって飛行する(エコロケーション)小型のコウモリに 対して、オオコウモリは視覚にたよって空を飛びます。夜でも目が見えますが、ほんとうに真っ暗だと飛ぶことはできません。月や星の明るい夜や人家の明かりの近くが好きで、昼間飛ぶこともあります。

～オス・メスの見分け方～

オス：首の周りが、黄色い。
メス：首の周りが、白い。
　　オスより少し小さい。

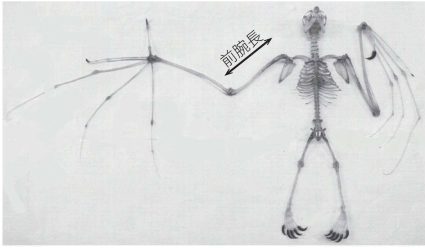
メス
写真提供:大沢夕志氏
（http://fruitbat.jp/）

オス
写真提供:船越公威氏

翼を広げるとカラスくらい

体重　　：オス約550g、メス約500g
頭長　　：約７cm
前腕長　：約14cm
（メスはオスに比べ少し小さい）

↑翼は、腕と手足の間の皮膜。第一指には「?型」のかぎ爪があり、食べるときに枝を引き寄せたり果実を抱え込む。



←空を飛ぶのに適応して骨は軽い。

写真提供：舩越公威・國崎敏廣氏

写真提供:面河山岳博物館

～モモンガと何がちがう!?～

コウモリは哺乳類の中で唯一空を自由に飛ぶことができます。モモンガやムササビも空を飛ぶと思われがちですが、短時間短距離を「滑空」しているにすぎません。体のつくりも違います。モモンガやムササビは体に発達した膜を広げることで滑空を可能にしているのに対し、コウモリは前足の指の骨が長く進化しており、指の間や腕、後足まで大きな膜を発達させたことで、空を自由に飛ぶ能力を獲得しました。

何を食べる？

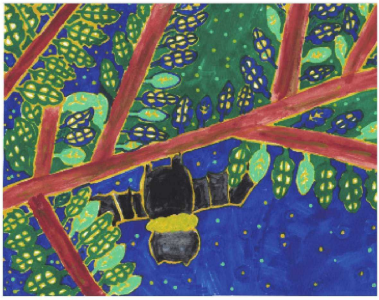
果実が主食ですが、葉、樹皮、花蜜、昆虫も食べます 。

表1　エラブオオコウモリがエサとして利用する木の種類と季節

3～5月	＜果実＞リュウキュウバショウ、オオイタビ、 シマグワ、ガジュマル、アコウ ＜花蜜＞ワシントンヤシ、アキグミ ＜ 葉 ＞マルバグミ
6～8月	＜果実＞ガジュマル、イヌビワ、アコウ、ヒゲモモ ＜ 葉 ＞マルバグミ、キカラスウリ ＜昆虫＞大型甲虫など
9～11月	＜果実＞ガジュマル、アコウ、オオイタビ、 ハマヒサカキ、ホルトノキ、ナシカズラ
12～2月	＜果実＞ハマヒサカキ、オオイタビ、ナシカズラ、 モクタチバナ、ガジュマル青果、 アコウ青果、シャシャンボ ＜葉や樹皮＞アコウ、ガジュマル

タネは飲み込む？吐き出す？

果実を口の中でかみ砕き、果汁だけを飲み込んで、食べかすを吐き出します。果実は柔らかいものが好きで、種が小さいと飲み込みます。吐き出した食べかすを食痕（ペリット）と言います。



エラブオオコウモリを見つけよう!

エラブオオコウモリに出会える木

エラブオオコウモリは集落の近くの様々な種類の木の果実や葉をエサとして利用しています。
下の表とオオコウモリ観察マップを見ながら、昼間のうちに、木や食痕(ペリット)を見つけておきましょう。
湯向集落の観察マップは次のページにあります。

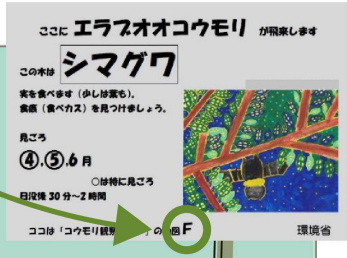
表2　エラブオオコウモリに出会える木

木の種類	マーク	看板がある木
アコウ		A2・X
イヌビワ		J
カキ		-
カジュマル		B・Z
グワバ		-
シマグワ		A1・F・M・O・T2
ハマヒサカキ		V
ヒゲモモ		Y・Q
マルバグミ		L・U
ワシントンヤシ		-

看板を探そう

エラブオオコウモリが見やすい木には、看板があり、木の名前とコウモリの見ごろなどが書かれています。
看板にはアルファベット(○参照)が書いてあります。地図を頼りに、木と看板を探しましょう!

看板の例→



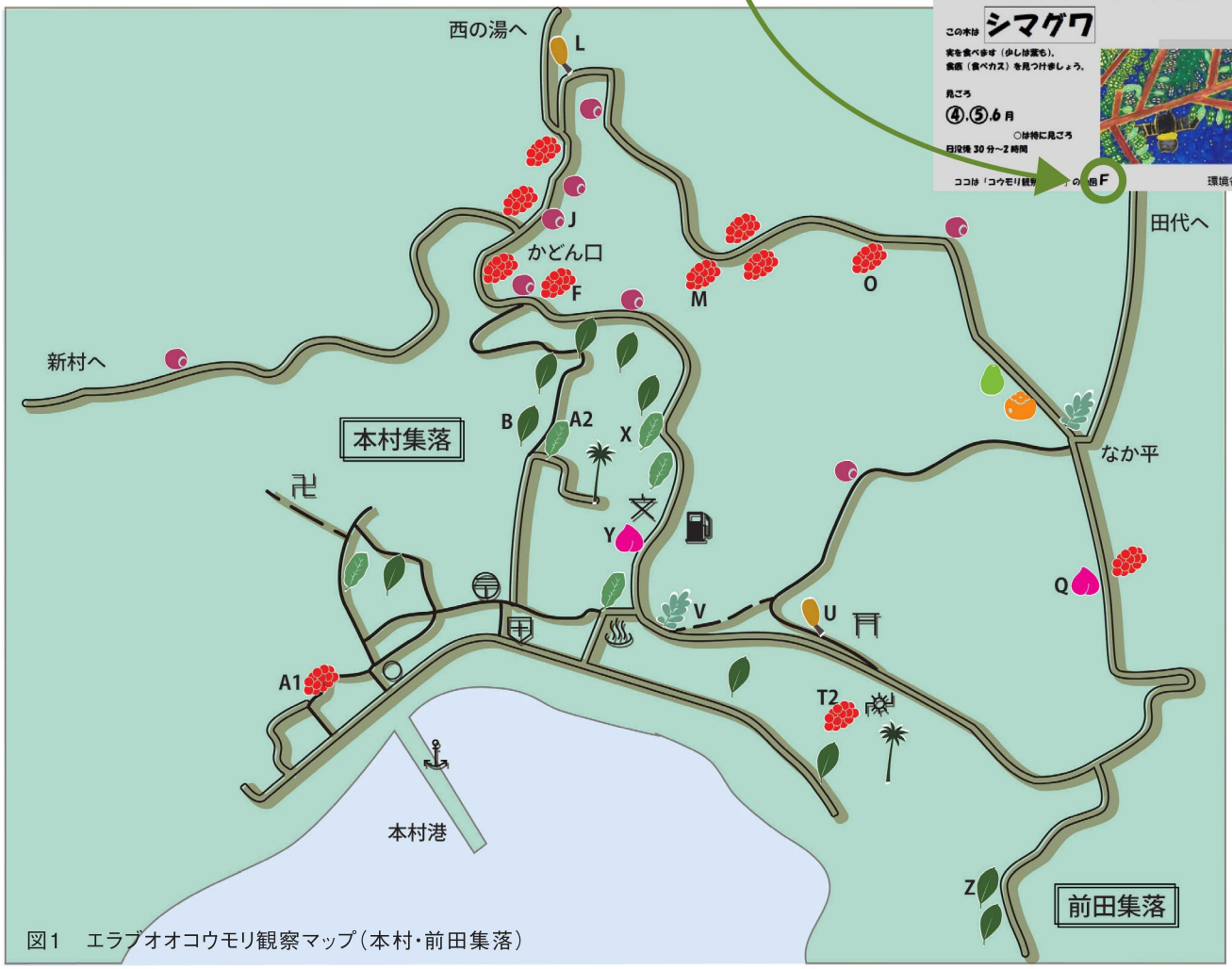


図1　エラブオオコウモリ観察マップ(本村・前田集落)

看板を探そう・2

前のページに引き続き、湯向（ゆむぎ）集落の
看板も見つけてみましょう！

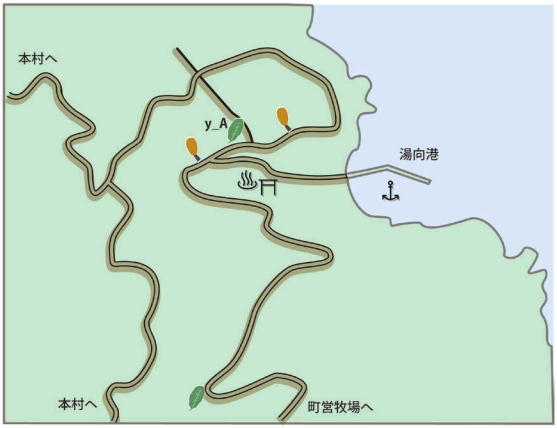


図2　エラブオオコウモリ観察マップ（湯向集落）

表3　エラブオオコウモリに出会える木

木の種類	マーク	看板がある木
アコウ		y_A
マルバグミ		-

図3　目撃が多い場所
（出典:國崎・舩越、自然愛護,20,1994）

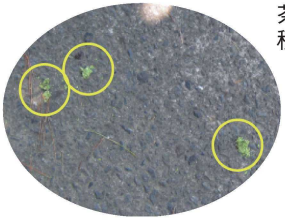
食痕を見つけよう!

エラブオオコウモリの食痕

道路を歩いて木の下を注意深く見ると、エラブオオコウモリの食痕（食べかす、ペリット）が落ちています。昼間のうちに食痕を探し、その木を覚えておきましょう。
日没から約30分後、タイミングが良ければそこにエラブオオコウモリが飛来します。

ヒゲモモの食痕
約4㎝の実の一部がかじられ、縁の皮や種が残る。

シマグワの食痕
茶色、2㎝くらい。小さな種が残る。



マルバグミの食痕
緑の塊（長3㎝、幅2㎝くらい）、葉はボロボロ。

イヌビワの食痕と果実
くすんだ茶色、2㎝くらい。

アコウの食痕
茶色、2㎝くらい。小さい種が残る。

もっと知ろう！エラブオオコウモリ

生息頭数

口永良部島に50～100頭が生息すると推定されています。トカラ列島の生息頭数は分かっていません。（船越公威氏の推定、2017年）

繁殖

秋にオス・メスが巨木へ集まりペアができます。交尾は、9月中旬に始まり10～11月がピークです。出産は春で、5～6月がピークです。8月頃(生後約3カ月)に離乳し、幼獣は9～10月(生後4～5カ月)に母親から独立します。

寿命

野生では、5～6年くらいだといわれています。飼育下ではより長く生き、鹿児島市平川動物公園で飼育している個体は、26才です。（2020年現在）

えさ場とねぐら

＜夜＞日没後、平均40分くらいで、ねぐらからえさ場に到着し、果実や花蜜、葉、昆虫を食べます。ねぐらからえさ場の距離は、春・夏の約300～500mに比べて、食物条件が悪くなる秋・冬の方は約500～600mと長くなります。

＜昼＞日の出が近づくと、ねぐらである谷間の林の中（洞窟ではありません）にばらばらで帰り、日が昇るころには就寝します。一頭一頭ばらばら、もしくは数頭で寝ています。ねぐらは毎日かわります。

社会

群れをつくりません。また、縄張りがありません。昼間は、ペアであっても、オス・メスは単独で睡眠・休息します。離合集散（離れたり集まったりすること）的な社会構造をしています。

エラブオオコウモリが暮らす島々

- 口永良部島： 分布の最北端
- トカラ列島 ： 中之島、悪石島など
- 屋久島：時々死体が見つかる（生息はしていないと考えられます）

エラブオオコウモリの仲間たち

翼手（コウモリ）類に分類されるオオコウモリは、世界で約1100種が見つかっています。
約5400種の哺乳類の中で、約2割を占めています。
日本では35種のコウモリがいて、オオコウモリ科では、クビワオオコウモリとオガサワラオオコウモリの2種が生息しています。
エラブオオコウモリは、クビワオオコウモリの亜種の一つです。日本では、他の亜種に、オリイ、ヤエヤマ、ダイトウオオコウモリがいます。

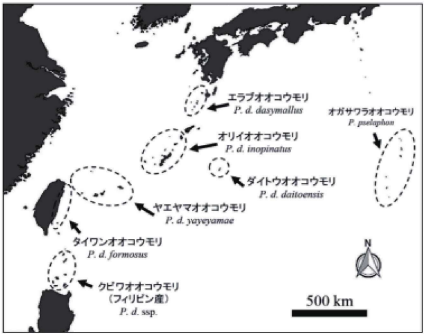


図4　クビワオオコウモリとオガサワラオオコウモリの分布
点線で囲まれたエリアは各種・亜種のおおよその分布域を示す
（出典:中本敦,哺乳類科学,2019）

エラブオオコウモリを守ろう

2014～2020年にかけて、環境省によるグリーンワーカー事業や、エラブオオコウモリ保全推進事業が実施されました。
それを機に、地元の環境保全グループが、口永良部島の貴重な動植物の調査を始めました。
エラブオオコウモリの調査や観察案内の看板を設置したり、リーフレットや観察ガイドを作成するなど保全・啓発活動を続けています。
島の皆さんにも、来島者の皆さんにもエラブオオコウモリに関心を持っていただき、絶滅が心配される本亜種を守りましょう。

保護の取り組み

1975年
国の**天然記念物**に指定

1991年
環境省レッドリストの**絶滅危惧種IA類**に指定

2019年
国内希少野生動物種に指定

※絶滅危惧IA類=
ごく近い将来に
絶滅する危険性が
極めて高い

エラブオオコウモリが集まる木や食べ物となる木を守ろう

繁殖などで集まるワシントンヤシなどの巨木、エサとなるガジュマル、アコウ、イヌビワ、シマグワ、ヒゲモモなどを大切にしましょう。

果樹への防護ネットを工夫しよう

沖縄では、タンカン被害防止のために張られたネットに絡まり死亡したオリイオオコウモリが、2007年～2017年の間に2000頭以上いました。網目の小さなネットにすることでからまりにくくなります。

口永良部島に生息する他のコウモリ

口永良部島には、他にも4種類の、昆虫を主食とする小型のコウモリが生息しています。
特に、スミイロオヒキコウモリは、舩越・國崎氏により、国内で2例目に発見されたコウモリで、他には奄美大島と与論島にしか生息しません。

表4　口永良部島に生息するコウモリ

種類	ねぐら	前腕長	体重	体毛の色
コキクガシラ	洞穴	4 cm	4.5～9g	淡い褐色
アブラ	家屋	4 cm	5～10g	黒・暗灰褐色
ノレン	洞穴	4 cm	5～10g	灰褐色・腹表白
スミイロオヒキ	洞穴	5 cm	（記録なし）	黒っぽい

～中学校で保護した エラブオオコウモリ～

エラブオオコウモリの生息・生態調査は、1984年当時金岳中学校教諭だった國崎敏廣先生によって始められました。先生は島内各地で食痕観察、個体の目視調査を実施することで、主に夜間の採餌、繁殖行動を解明しようとしました。
1985年8月からは、傷付き飛べなくなった雄雌のコウモリを保護し、中学校で飼育を始めました。飼育は中学生が担当し、小学生はエサとなる果実集めを担当しました。
1987年、このエラブオオコウモリは、先生の転勤に伴い鹿児島市平川動物公園に移されました。以後平川動物公園は、エラブオオコウモリの国内唯一の飼育・生態研究の拠点となります。
1989年には、生まれたばかりの幼獣が先生のもとに持ち込まれ、すったリンゴにミルクを混ぜた餌をスポイトで与えるなどして飼育に成功しました。これは貴重な飼育研究の礎となりました。
1993年、平川動物公園は日本の動物園で初めてエラブオオコウモリの繁殖に成功しました。

▲コウモリと生徒たち
写真提供:(株)学習研究社

國崎先生になついたコウモリ・さち子▲
写真提供:FOCUS、9月19日1989年

観察に行こう!

観察会や学習会

「えらぶ年寄り組」は、島民や来島者を対象に、
エラブオオコウモリの「観察会」や「学習会」を開催しています。
興味のある方は、「えらぶ年寄り組」までご連絡ください。
（連絡先は裏表紙に記載）

観察するときの注意

地域住民やエラブオオコウモリへの配慮として、観察するときは以下を守ってください。
◆大声を出さずに、静かにしましょう。
◆ライトを照らす時には、長時間を避けて下さい。
◆観察中は、お酒やタバコはやめてください。
◆コウモリや食痕には触れないようにしましょう。

出典

この「エラブオオコウモリ観察ガイド」は船越公威・國崎敏廣氏らの研究成果をもとにして作成しました。
写真や図を提供していただいた船越公威氏、國崎敏廣氏、野田武氏、大沢夕志氏、中本敦氏、面河山岳博物館、新潮社FOCUS、（株）学習研究社の皆さま方、環境省屋久島自然保護官事務所のご助力に、心よりお礼申し上げます。

発行

2021年2月
子々孫々の口永良部島を夢見るえらぶ年寄り組
（略称　えらぶ年寄り組）
〒891-4208
屋久島町口永良部島1232-3
Eメール:　erabu.info@gmail.com
ホームページ：　http://kuchinoerabu-jima-senior.org

環境省補助事業「令和2年度補正予算　国立・国定公園への誘客の推進事業及び国立・国定公園、温泉地でのワーケーションの推進事業」により制作しました。